「気になるやつら」

—2 稿—

2023/07/07

川尻　佳司

〈人物表〉

川原　ゆの　（17）　芸術高校3年生
田中　数馬　（17）　芸術高校3年生
小幡　真凛　（17）　芸術高校3年生
唐木田　独歩　（21）　武蔵野芸術大学4年生　教育実習生

〈ログライン〉

「ゆのが数馬と恋愛する」

〈ねらい〉

ゆのが数馬との出会いによって自分を信じる

1.　教室（昼）

ホームルーム。

唐木田独歩（２１）、生徒にプリントを配る。

川原ゆの（１７）、唐木田を見つめる。

唐木田、ゆのを見返して、微笑む。

ゆの、後ろの席の小幡真凛（１７）にプリントを渡して、

ゆの　「真凛、これ、効果てきめんだわ」

と、腕のブレスレットを真凛に見せる。

真凛　「ゆの、恋もいいけど、うちら、もう受験生だよ」

ゆの　「ねえ、このまま恋愛なしに、高校生活終わっていいわけ？」

真凛　「そんなもんじゃないのー、キャンパスライフに期待しよ」

ゆの　「真凛はいいよ、才能あるんだから、私は無理、将来やりたいことだってないし――」

と、誰かの視線に気づいて固まる。

田中数馬（１７）、ゆのを見つめている。

唐木田、ゆのに近付いて来る。

真凛　「ゆのっ」

唐木田「川原、今度の面談で先生最後だから、この後残るように」

ゆの　「はーい」

×　×　×

ホームルーム後。

ゆのと唐木田、２人のみで絵の添削をする。

ゆの　「やっぱだめですか」

唐木田、ゆのの絵を見ないで、

唐木田「うーん、川原、東都芸大は諦めろ、はっきりいって才能はないよ」

ゆの　「やっぱりだめかー、まあ薄々わかってはいたけど」

唐木田「なあ、今度大学の仲間たちとキャンプに行くんだ、川原も来ないか？」

と、ゆののブレスレットをつけた手をつかむ。

ゆの　「え、いやさすがに、今遊びには……」

唐木田「俺のこと嫌いなのか？」

ゆの　「え……」
唐木田「心配するな、選ばなきゃ学校なんていくらでもあるよ、
無難なところを書いとけばいい」
と、プリントを指さす。
ゆの、ふと視線を感じて廊下の方を見る。
数馬、廊下からゆのを見ていたが、視線をそらす。
唐木田「川原、どうかしたか？」
ゆの　「あ、いや、なんでも……」

2.

下駄箱（夕）

生徒たち、帰る。
ゆの、帰りがけ、ふと視線に気づき、振り向く。
数馬、ゆのを見ている。
ゆの、動揺を隠すように、何食わぬ顔で帰る。

3.

教室（昼）

授業中。
ゆの、腕のブレスレットを見つめる。
そして、数馬の席を見る。
数馬もゆのを見ている。
ゆの、すぐに向き直る。

4.

校庭（昼）

サッカーの授業。
数馬たち男子、サッカーする。
ゆの、数馬を目で追って、
ゆの　「田中君、どう思う？」
真凛　「え、田中君？　うーん、なんだろ、可もなく不可もなく、
普通かな」
ゆの　「普通、そう、まったくなんのとりえもない男よ」
真凛　「ああ、２年の文化祭の時、ゆの、田中君とお化け屋敷の
お化け役ペアでやってたよね」
ゆの　「うん、田中君がお客さん、全然怖がらせられないから、
喝入れてやったのよね」

真凛　「え、喝」
ゆの　「やっぱ、あの時か、あれからずっと、悶々とさせてきたみたいね、私も罪な女だわ」

5.

教室（昼）

休み時間。
ゆのの隣にふと数馬が立っている。

数馬　「川原」
ゆの　「え、え、ちょ、ちょ、ちょっと待って、なになに？」
数馬　「悪いんだけど、ちょっと話したいことがあるんだ、今日、終わったら体育館裏に来て欲しいんだけど」

6.

体育館裏（昼）

人気のない体育館裏。
ゆのと数馬が向き合って、

数馬　「川原、俺が見てたの気づいてただろ」
ゆの　「ああ、うん、なんか私に言いたいことあるの？」
数馬　「変に思わせてごめんな」
ゆの　「ああ、別にそんなことないけど」
数馬　「なかなか、言い出せなくて、その……」
ゆの、固唾をのむ。
数馬　「そのブレスレットどこで手に入れたんだ？」
ゆの　「（大きめの）は？」
数馬　「しっ、お前、あるんだろ、霊力ってやつ」
ゆの、一瞬固まる。
ゆの　「あー、田中君もあるんだ」
かずま、足首の水晶のアンクレットを見せる。
ゆの　「おお、これは死にかけてるね」
数馬　「やっぱり、わかるんだな、たのむ教えてくれ」

7.

天然石専門店（昼）

数馬、水晶を手に取って。
数馬　「死んでる」
ゆの、別の水晶を数馬に渡して、

ゆの　「どう？」
数馬　「ああ、これ熱いな」
　　ゆの、店員に、
ゆの　「すいません、これでお願いします」

8.　**街中（昼）**

数馬　「助かったよ、ここんところすげえ調子良くなくて」
ゆの　「田中君、霊力あるんだって知らなかった、ほら、お化け屋敷やった時も、そういうの全然疎そうだったから」
数馬　「そういうの周りに知られるとめんどいからさ、極力隠してんだ、だけど、川原がそのブレスレットしてんの見て、ああ仲間だって、いつも行ってた店が急になくなってさ、本物扱ってるとこって中々ないんだよな」
ゆの　「本物か、結局効果あるんだか、ないんだか」
数馬　「なんの効果だ？」
ゆの　「いや別に」
数馬　「なあ、川原、その、これからもこういうことで相談相手になってくんないか、たのむよ、俺今までこういうこと話せる仲間がいなかったんだ」
ゆの　「いいよ、私も別にそんなに詳しいわけじゃないけど」
数馬　「やったあ、ありがとな」

9.　**美術室（昼）**

　　油絵の授業。
　　数馬が真凛に向かって、
数馬　「小幡、川原どうした？」
真凛　「ああ、ちょっと、スランプっていうか」

10.　**屋上（昼）**

　　ゆの、遠くの景色を眺めている。
　　数馬、来て、
数馬　「よっ」
ゆの　「田中君」
数馬　「俺の霊感は冴えてるなあ」

ゆの　「こわーい」
数馬　「何で描かないんだよ」
ゆの　「何描いても意味ないよ、別に誰も求めてないし」
数馬　「……川原の絵、俺好きだよ」
ゆの　「ありがと、私も絵が好きだと思ってた、それでいいと思ってた、でも、それも今じゃよくわかんないよ」
数馬　「唐木田からなんか言われたのか」
ゆの　「ちがう、わかってたんだよ、それに改めて気づいただけ」
数馬　「あんな遊び人の何がいいのか」
ゆの　「わかってるよ、そんなこと」
数馬　「なあ、あの文化祭で俺になんて言ったか覚えてるか」
ゆの　「あ、まだ恨んでんの」
数馬　「ちげーよ、感謝してんだ、みんなでなんとなく始めたお化け屋敷だったけど、なあなあで流さないで、川原は真剣にやるために怒ってくれたよな」
ゆの　「私はただ、たった一度の高校生活楽しみたかっただけだよ」
数馬　「俺、他の事は忘れちまっても、あのお化け屋敷やったことは多分ずっと覚えてると思う、この先思い出してまた元気出すと思うんだ」
ゆの　「田中君」
数馬　「インスピレーション湧いてきたか？」

11. 美術室（夕）

イーゼルに置かれた、ゆのの描いた絵。

12. 教室（朝）

ゆの、教室に入って来る。
真凛　「ゆの」
ゆの　「ごめん、心配させて」
唐木田　「川原、来たな」
ゆの　「先生、ごめんなさい、私書いてきました」
と、唐木田に進路を書いた紙を渡す。
紙には東都芸術大学の文字。

〈終わり〉